
スピリット

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スピリット

【Zコード】

Z5094A

【作者名】

ジャン

【あらすじ】

この世界には『スピリット』と呼ばれる個人で別々の物がある。その人の精神に関係しており人によってさまざまであり槍等の『物』になる。そんな世界で藤野銀次が守る草野家の三姉妹、由香、舞、リンと様々な事を乗り越えるファンタジーです。

第一話（前書き）

始めての小説で文章がわかりにくいため、よろしくお願いします。――

第一話

俺に親はない親なんて知らない知っているのは自分の槍と断末魔そして・・血の臭い俺はずつと血を流し続けると思っていた。

でも

俺はあの家族に救われた、命を狙ってきたはずなのになぜかその家は俺を新しい家族として迎えたそして一つの契約をした。それは・・・『彼女達を守る事』

俺は毎朝6時に起こされるそして朝の鍛練に顔をださないと行けない。そして俺の相手は絶対あの三人だ

「てやああ！」いきなり背後から飛び蹴りをしてきたが俺は半身引いてその蹴りをかわす

「また避けられたあ」

と飛び蹴りをしてきた少女草野舞は悔しそうに唸っていた、と思つと「えい！－！」

と幼い声とともに蹴りを入れようとしていた子供の軸足に軽く足を引っ掛けで転ばせた

「うぎゅ」と変な声をあげて倒れた子供草野リンは鼻を押さえて涙目になつていて床に座り込んでいる一人に（一人は俯せに倒れているが）

「由香はどうした？」

と聞いて見ると一人とも顔を上に向け（リンは俯せになつているので目だけだか）指をさしたその方向に向くと天井があつた『いないぞ』と言葉を発しようとしたら突然俺は押し倒されたそして押し倒した本人は

「勝つたあ！」

と言つて俺の腹に乗りながら満面の笑みで俺を見てきた少女草野由香は笑顔で俺の上に乗つていて退けようとしない・・・・俺がかせようとしたら由香はグラッと体を揺らし大の字に倒れている俺

の右手に倒れ、結果俺が由香に腕枕をしている状態になる

「お、おい由香ー」

俺が何事かと思い由香に話しかけると

「スー」

と氣持ち良さそうに眠っている由香がいた『ハアー』俺が溜息をつくと由香がいない方の腕も重くなりそちらをみると、リンと舞が笑顔で俺の方を見ていた

その眼には『リンもー、舞もー』と何かを訴えて来ていたそして俺が何かを言う前にリン、舞共に夢に落ちていた『早つ！！』とびっくりしながら自分の状態を確認した・・・そして5分後・・・俺は夢のなかだったそして暫くして俺が起きるともう十一時半で

「遅刻だあああー！」

と叫び両腕に寝ていたリン、舞、由香が飛び起き三人そろって

「「「何！－！－！？」」「

と言つて次に時計を見た由香が

「遅刻だあー！－！」

といつて道場から風の用に走り去つた、それに続く用にリン、舞、俺も走りだしたがリン、舞は笑顔で

「「遅刻だあー！」

と騒いで俺の背中に飛び乗リロンが

「お兄ちやん、遅刻するの？」

と笑顔で聞いて来て無視して進もうとする

「銀兄、遅刻かあ～」

と舞が俺の足に捕まり笑っていた「遅刻だ！…つてかお前らも遅刻だから早く学校の準備してこいー！…置いてくぞー！」

俺が言うとソ、舞は笑つて学校の準備をするため自分の部屋に走つて行つた。

自己紹介が遅れたが俺の名前は藤野銀次（ふじの、ぎんじ）身長178cmで顔もぐく普通だと思つ。（想像にお任せします）そして色々会つて今はこの草野家にお世話になつている。

「銀次～何やつてんのあ、行くよお～」

とゆつたりした口調で話しかけて来たのがこの草野家の長女の草野由香だ。身長は俺より20cm程低く俺の胸に調度顔が当たる程度の背で髪はストレートで黒く腰の辺りまであり、顔は可愛い系だと思ひ。

「銀次何してんのあ！？遅刻しちゃうよー！？」

「もう遅刻してるからー！…んなことよりリンと舞はー！」

俺が言うと同時に俺と由香の背中にリンと舞が抱き着き

「「終わつたよおーー。」」

と言つてきた。ちなみに俺に抱き着いてきたのが草野リンで年のせ

いか家で一番の甘えん坊だ（銀次と由香が18才、舞が8才、リンが7才だ）そして由香に飛び付いたのが草野舞でかなりのおてんば娘だなにかあるとリンと一緒に騒いでいる。

「おし、とりあえず早く行くぞーー！」

「うん」

「「はあ～い」」

第一話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。これからも頑張るので楽しいと思えた人は続きを読むで下さると嬉しいです。

第2話（前書き）

読んで頂きありがとうございます。今回も少し長いですが最後まで読んでいただければ幸いです。

第2話

今俺は寝坊してしまい由香、舞、リンと学校に向かっている。そしてなにげなく後ろを走っている由香達を見るなんか一人足りないような・・・俺が止まるとき後ろに走っていた由香、リンは俺にぶつかった『ドン』

「「ふざゅ」」

由香とリンは同時に変な声を上げた。

「由香・・・・・」

「いつたあ〜、どうしたの急に止まつて?」

由香は俺を恨めしげに見る

「舞がない・・・・・」

「えつ・・・・・」あの野郎またいなくなりやがった!! 今月に入つて何回めだ! そんな事考えてるとリンが俺を『どうしたの? 学校は?』てな感じで見ていた・・・・・『ハア~』俺は溜め息をつき由香の方を見て咳く。

「由香また頼むわ」

「う、うん・・・・・」

由香は苦笑いをしていた。

由香は右手を胸の前に出し握る。

「《方位神》(ほついじん)」

と咳くと右手を開く。開いた由香の右手に乗っていたのは方位磁石

のよつな物があつた。由香が方位神に向け『草野舞』と静かに言つと方位神の針が南東の方向に向いていた。

「あつちか。」

俺は由香の方位神を見て南東の方に走りだす。

俺が走りながら由香に

「本当に由香の方位神は便利だな、得に舞とか搜す時は」「あはは、でも一度顔を見た人で名前を知ってる人じゃないと搜せないけどね」

そう由香のスピリットの方位神は顔を見てなおかつ名前を知らないと意味を成さない物らしい。それでもやつぱり便利だと思う。舞なんかはいつも気付いたらいなくなつてる事がが多いのでよく由香の方位神を使い捜している。そしていつもいなくなつた舞を捜しだし見つけると

「銀兄いー」

と泣いて俺のとこにくる。草野家の人は皆泣き虫のよつでよく泣いている所を見る。

「舞、なんでこんなとこにいるんだ?」

俺が疑問に思う事を素直に口にした

「ヒック・・・・だつて前に銀兄達と来たから・・・・ヒック・・・
・いふと思つて・・・」

舞が居たのは先週の土曜に来たゲーセンだった。『ハアー』俺は溜め息をつき静かに舞に

「今度から離れるなよ」

と一言、言つて舞の頭を撫でた。舞は安心したような表情を見せる
と俺に抱き着いて来て『・・・・・・・・・・・・』声を殺して
泣いて居た。その時由香とリンは『やれやれ』といった感じの表情
を見せて微笑していた。

舞が落ち着くまでの間近くのベンチに四人で腰かけていた舞は泣
き止むと俺の腕の中で『ス～』と寝息を立てていた

「おい、舞起きろ学校行くぞ。」

『ん～』

俺は舞の寝顔を見た後由香を見ると『頑張つて』って田で言つてい
た。『またか』と思い俺はゆっくりと舞を抱き抱え、由香、リンと
学校に向かった。

結局学校に着いたのは昼休みの終わり頃だつた。

俺は寝ている舞と途中で『わたしも～』と言つて寝たリンを先生に
任せて俺達も自分達のクラスに向かった。

俺達が通う桜木高校は、保育園から大学まである変わった高校だ俺
は中学三年の終わりにこの学校に来た。そしてエレベーター式でこ
の高校に入学して今に至る。俺と由香は職員室に行き遅刻届けを書
き担任の荒縄あらなわという先生に小言を言われてから教室に入る。俺と由
香は同じクラスで教室に入る

「銀次～やつときたのかよ、今日はもう来ないと思つたんだけどな

俺に真っ先に話しかけてきたのは俺の親友、そして相棒の真田刃さなだじん

「なんだよ来ない方がよかつたのかよ?」

俺が冗談で言つと刃が

「うん」

平然といいやがつた！しかも真顔で即答！

「刃でめえ～」

「ははつ「冗談だよ！冗談！んなこともわからねえのかよ
「てめえのは冗談に聞こえねえんだよ…」

「なんでだよ！？」

俺と刃が言い合ひしてると横から

「ストップ～…！」

と由香が怒鳴つた。

「銀次、またご飯抜きにするよ」

そう言つた由香は笑つてはいたが目が笑つていなかつた。俺は素直に頭を下げた。いつものんびりマイペースの由香だから俺がなにかするところなるだから俺は由香には逆らえないし逆らわない。

第2話（後書き）

第2話を「」見頂ありがとうございますこれからも楽しい小説を書いていかたいと思つてよろしくお願いします。

第3話（前書き）

前よりも長いです。楽しんで頂いてる事を祈つて頑張ります。

第3話

授業が終わり放課後。

俺は由香と一緒にリン、舞を向かいに行つた。向かいに行くと言つても同じ学校の敷地にいるのですぐに着く。暫く学校の玄関前で待つてると

「由香姉え～」

「お兄ちゃん」

と言つて俺と由香に飛び付いてきた。俺はちょっとふりつきつつになるがいつもの事なので耐える。

「お兄ちゃん～、おんぶ～」

俺に満面の笑みを向けた小さな悪魔は俺の返事を聞かず俺の背中に周りこみ首に手をまわした。

「お兄ちゃんの後ろとったあ～」

と言つて俺から絶対離れようとしない。『ハア～』俺が溜め息をつくと足元で舞が拗ねていた。舞の口には『するいい～』と言つた感じがあった。俺がどうすべきか考えていたら由香が

「舞い～今日は私がおんぶしてあげよっか？」

と助けてくれた。舞はその言葉を聞いて『パア』と明るくなり

「うん～..」

といつて由香の背中に飛び付いた。それから家に帰る道ではリンと舞の今日どんな事があつたのかを話ながら家に向かつ。いつもは寄り道をしないで家に向かつが食品がきれかかっているのを思いだし四人でデパートに入った。その時に舞が由香の背中から飛び降りたのでリンを降ろさうとする

「もつとお～」

と涙声で言つて來たので仕方なくおぶつたままデパートに入る。その時由香が『買ひ物いつてくるから銀次と一緒にいるんだよ』と言つて俺とリン、舞を置いて食品売り場へと向かつて行つた。由香がいなくなるとリンと舞が俺の膝に寝転がり

「「おやすみ～」」

といつて寝た・・・・『早つ!..』と俺はまた驚きびうするか考えた・・・・結論・・・・黙つて寝かせとく。俺はリンと舞の頭撫でてみると一人は『ん～』と嬉しそうな顔をして夢に落ちていた。30分くらいして由香が

「「めん～、少し遅くな・・・・大変だねえ、銀次?」

俺の今の状態を見て由香は呟いた。

「舞を頼み」

と言つてゆつくりと舞を由香に渡し俺はリンの体をお姫様抱っこ見たいに抱き抱え由香と一緒に家へと向かつた。

帰り道由香が突然真剣な顔をして

「銀次も変わつたねえ～」

「なんだよ、いきなり」

由香は俺の顔を見て

「昔は持つと鞘のない刀見たいな目してたからね」

「おかげでいつも舞とリンに泣かれたな・・・・・」

「でもあの事があつてやっぱり銀次は変わったね。怖かつたけどすごい嬉しかったもん。それに銀次の笑った顔始めて見たのもあの時だつたもん」

俺はその話を苦笑いをして聞くしかなかつた・・・・・

俺が始めて草野家に来た時俺は由香達の父さんを殺そうとしていた。俺はその頃どこの組織に雇わて由香達の父さんを殺そうとした。でも殺せなかつたんだ由香達の父さんが俺より強かつた訳じやない。強かつたのは・・・・・・・・・

由香、リン、舞の三姉妹だつた。

力が強いとかじゃなくて純粋な思いが強いと思つた。そして俺はそこで始めて家族を知り、『愛』を知つた。俺にしがみつく姉妹を見て俺は力がなくなりその場で気絶した。次に気がついたら知らない家のベットでその横に三姉妹が寝ていた。俺はいつも安心して寝れなかつた。だけどそんな俺が初めて安心できた。『ここなら大丈夫』そんな気がした。俺は一度めの睡眠という行為にでた。安心できた。そして俺が次に目を覚ましたのは一日後だつた。俺が起きると三姉妹はいなくなつていてかわりに目の前に俺が命を狙つた人がいた。その人は静かに、でもしつかりと言つた。

「家族にならないか?」

と。俺はその後どうしたかとかは覚えてない。覚えているのはその

人に言われた

『彼女達を守る事』

それから俺は草野家に住んでいた俺はその時14才だった。そして
俺が目を覚ましてから一ヶ月たつた頃
『あれ』が起きた。

第3話（後書き）

前話より長くてすいませんこれからも過去を語りますが後一話程度で終わります。

第4話（前書き）

読んでくれている人本当に感謝しています。

俺が目を覚まして一ヶ月がたつた。

リンと舞という子供はまだ俺の顔見たら泣きだし姉の由香の後ろに隠れ俺を見ている。なんで舞とリンが俺を見て泣くか・・・・そんな事俺にだつてわかつた。俺は笑えない。感情を表に出せなかつた。どんな事も無表情でこなしていた。そんな時三姉妹がいなくなつた。三姉妹をさらつたのは俺がいた組織だった。ただ一言伝言で

『親を殺さなければ三姉妹を殺す』

と・・・・・・・・俺は何故かわからないが気がついたら組織のアジトに一人で挑んでいた。

俺のスピリットは槍。槍の柄尻には釣の重りに似ている物が着いておりそれは俺の意思で大きさを自在に返る事が出来る。普通の状態は縦に30cm横に15cmにしてある。槍の刃の所は一対の70cm程度の刃が着いている。柄の長さは約2mある。そして斬戟を飛ばす事が出来る能力がある。これが俺のスピリットである

『鬼神戦神楽』（これからは『神楽』となります）

俺はスピリット『神楽』を右手にだし光速の一振りをアジトに叩き込んだ。そしてそれを合図にしたように次々となだれ出てくる敵を薙ぎ払つて行き敵の一人を殺さず両手、両足の骨を折り首に『神楽』を突き付け

「由香達は何処だ?」俺は敵から居場所を聞き出し（当然、敵は全て殺したが）由香達がいる部屋に向かった。部屋のドアには鍵が掛かっており普通だったら開かないが俺の『神楽』にはどんな物であろうと関係ない。

一閃。

ドアどころか周りの全てを吹き飛ばし俺は部屋の様子を見た中には殴られたのか三姉妹がぐつたりとしていた。その隣に人影があつた様な気がした。俺はそこ全て（三姉妹を除く）を

『神楽』で吹き飛ばした。由香、舞、リンはどうやら多少殴られたようだが外傷もあまりなかつた。俺は由香を中心抱き抱え、リンと舞は両腕によしかかるように寝させ俺は自分の力のなさを実感していた。まだ会つて一ヶ月しかたっていないが俺は由香、舞、リンを守りたい守らなくちゃ行けないと思つていた。もの思いにふけていると正面に抱き抱えている由香から『ん～』と聞こえた

「由香大丈夫か？おい、由香」

「ん～、・・・あれえ、銀次君なんでいるの？私変な人達に連れてこられてそれで・・・」

最後の方の声は殆ど聞こえないような声だった。そして隣にいる舞、リンも意識が戻つた。

「「？」」「

何がどうなつたか解らないといつ感じで見てくる一人を見て

「もう大丈夫だ」そういつた俺の顔を巨額の表情で見てくる三姉妹・
・・・俺が耐え切れなくなり

「どうした？」

と聞くと由香、舞、リン三人が笑顔で

「笑つたあー！」

と叫んだ。その後暫くして疲れたのか由香、舞、リンは眠りについていた。俺は舞、リンを両肩にのせ頭によしかかるようにのせ由香は両膝と背中を持ち顔を自分の胸へよしかかるようした。俺はその状態を草野家につくまでして草野家に着くと真っ先に由香の父さんに叩かれた。

「もしもの事があつたらどうするんだ！？」

由香達の父さんは俺をにらみ胸倉を掴みそうにつた。「俺が命に変えても守つくる覚悟あつたから」

俺が答えると由香達の父さんは優しく

「由香達もそうだけど、銀次。君にも何かあつたんじやないかと思つて言つているんだ」

と静かに言った。

「どうして？どうして他人の俺の事まで心配するの？」

答えはわかつっていたと思つそれでも本人に聞きたかった

「銀次も私の家族だよ」

この言葉を聞いて俺は初めて大声だして泣いた。悲しい訳じゃない。痛い訳じゃない。これは嬉しいからだ。嬉しい・・・俺は素直にそう思つた。だから今日から俺の自分の藤野銀次の始まりだと思つた

第4話（後書き）

まだ長く続くと思つので、よければ完結できるまでお付き合いでお願
いします。

第5話

「そんな事もあつたな・・・」

俺小さく咳くと隣の由香が

「それにあれから銀次の事リンが『お兄ちゃん』舞が『銀兄』だもんねえ。」

「それから一週間ぐらいい俺のベットにかつてに潜つてきて騒いでたしな・・・」

そんな昔の事を話て帰つていた。家に着くと計つていたように舞とリンが飛び起き俺と由香の背中から離れ

「銀兄！..かく』お~

「かく』お~」

と言つて俺の左右から飛び蹴りをしてきた。俺は何事もないかのように舞とリンの飛び蹴りしてきた方の足を掴み

「さつさと着替えてこい。そしたらちゃんと遊んでやるから」俺がそういうと舞とリンは笑顔で自分の部屋に走つて向かつた。その場に残された俺と由香はいつもどうりに家に入り俺は部屋に向かい由香は台所で『飯支度をするため向かつていた。・・・・・・・・

暫くして・・・・

「『『『疲れたあ~』』』

と俺、舞、リンの三人が晩飯求めて台所に来た。時間はもう19時30分で由香がちょうど支度を終えて俺達を呼びにいこうとしていた時だつた。四人で晩飯を食べ終えた時ちょうど由香達の母親が帰つてきた。

「お帰り、お母さん。あれ？お父さんは一緒にないの？」

由香が母親に問いつと母親は無言で由香に近づいてきた。由香は一つもと違つ雰囲気をもつ母親に恐怖を感じ少しづつ後ろに下がつて行く。

俺は何か違和感を感じ母親を見て眼を見開いた。

「舞、リン。眼と見た耳を塞いでこいつを向くな」

「え？ ……」「

と言つて俺の隣に座つてゐる舞、リンは後ろを見よつとしたが

「見るな…………」

と俺の怒鳴り声を聞いて眼と耳を塞ぎ小さくなつた。俺はそれを確認すると再度母親の方を見て

「由香逃げろ…………」

と言つて母親を蹴飛ばし由香の前に行く。由香は何が起きたがわからぬいよつな顔をしていたが「逃げるぞ…………」は囁まれる……

と言つた俺の声で『ハツ』とし舞、リンを抱え家から出た。舞、リンは俺の言い付けを守つてゐるので小さくなつていた。俺は抱えているリンの頭を撫でた。

すると舞はゆづくじと眼を空けて俺の顔見てきた俺は笑つて舞の顔を見て

「少し寝てろ…………」

と言い舞はその言葉を聞き俺へと体を任せ楽にした。リンを抱えて
いる由香は既に眠りに着いていたリンを見てから俺に

「銀次、どうしてお母さんから逃げたの？」

由香は全くわからないといった感じ俺に聞いてきた。俺は何も答えず俺のスピリット『神樂』を出す。

『神樂』を見て由香は驚いたがすぐにいつもの由香に戻つて『これからどうするの？』と聞いて来たので俺は答えず口だけで『真田刃のどこに行く』と言つた。由香はスピリットの『方位神』を出し『真田刃』と言ひ。すると方位神は北に針を向けた。

「北か・・・・刃にあつたら由香、舞とリンを頼む。」

「えつ・・・・・どうゆうこと？」

「それは・・・・・」

「おお～い！銀次、どうした？」

俺が由香の問いに答える前に真田の俺を呼ぶ声が聞こえ由香は黙つた。俺の右手の『神樂』を見て真田は真剣な顔になり

「どうしたらいい？」

と聞いてきた真田と俺達の前に突然体長2m近くの男が上から落ちてきた。

「！」こつらを潰す！――

俺は舞を真田にまかせると『神樂』を横殴りに振るい男を胴体から真つ一つにした。男は本来流す血を流さずにちいさな爆発が起きた。

俺はその様子を見て

「刃、どこの奴らかわかるか?」

俺の問いに真田は真剣な顔で

「組織に戻つてみないとわからんねえなでも多分狙いは・・・・・」

「俺達の誰かか・・・・・」

第5話（後書き）

やっと話が動き出しました。これからもお願いします

第6話（前書き）

か」じへ長こです。今までで一番長いです。楽しんでください。

第6話

俺、由香、舞、リン、刃 の四人は今真田家の居間にいる。

「……でどうすんだ、銀次？このまま逃げて戦うか？」

「逃げはしない。俺は由香達を守らなくちゃ行けないからな」

俺と刃が話ているとき由香は話の内容をじつと聞いていたが舞とリンはさっぱりってな感じで一人でじゃれあっている。

「とにかく、組織で聞いてくるよ」

「ああ、頼むよ刃。とりあえず俺達は帰るよ、ありがとな刃」

「気にすんな相棒。そのかわりなんかあつたら俺に言えよ。背中ぐらいは守つてやっからよ」

「そりゃ頼もしいこいつで」

会話が終わると俺は由香達に視線を向けた舞とリンは真田ん家の物を荒し回っている。そしてソファに座っているはずの由香がいない事に気付いた。（俺と刃はソファの後ろのテーブルにいるのでソファに座っているなら見える筈だが）俺がおかしく思いソファに近づくと

「ス～」

と寝息をかいて気持ち良さそうに寝ている由香がソファに寝ていた。

「どうした銀次？草野になんかあつたか？」

真田がソファに近づきソファに寝ている由香を見ると

「頑張れ銀次。そんなにここからなら遠くないだろ？それに今日ビジネスホテルに四人で泊まるんならそれまででいいんだから」

「ハア！！刃お前何言つてんだ！？」

「なんだ違うのか？」

「たりめえだろ！？そんな金ねえし！」俺が金がない事を言つと刃が『ハア～』と溜め息を付き俺に

「じゃあお前はまた母親のとこ行つて襲われてくんのか？」

「それは…………」

「金なら俺がなんとかしてやるから。それに舞けりゃん達ももう既にうだぜ」

舞とリンはハシャギ疲れたのか寝ている由香の隣でうとうとしていた。

「…………わかったよ、本当に金はなんとかしてくれんのか？」

「おう！何回も言つてんだる、それになんかあつたらホテルから俺んところに連絡くるから」

「なんで？」

「俺の親父んどこのホテルだからなんがあつたら俺にすぐ連絡くるつてこと」

「刃の親父さんのホテルつて前にお世話になつたあのデカイどこか？」

？」

俺が引いた顔で聞くと刃が

「なんだ、嫌なのか？」

「嫌つて訳じやねえんだけど……」

刃の親父さんのホテルはテレビなどでも紹介されている『超』がつ

くまビの高級ホテルだ

「嫌いやねえならいいだろ、さつさと行くぞ。」

そう行つて玄関に向かつて歩きだした刃に

「運転どうちがすんだ？」

と聞いたら刃が中指にあるキーを回していた。俺はその仕草を見た後

「舞、リンホテル行くから刃の車のとこ先行つてる。場所はわかるな？」

「うん」

舞、リンはホテルと聞いた時目が光り、元気よく返事し刃の車に向かつて走りだした。俺は舞、リンがいなくなるのを確認すると由香をお姫様抱っこで抱えゆつくりと刃の元へと歩いて行つた。

……30分後……

「悪いな刃。舞とリン持つて貰つて」

「気に入んنつて相棒」

暫く車に乗つて騒いでいた舞とリンは途中で俺によしかかるようにして寝てしまいそれを刃が抱えてくれた。俺と刃は無言で歩き部屋の前まで言つてドアを開けベットに由香、舞、リンを寝かせると無言で俺の顔を見て笑い部屋を出て行つた。俺は暫く刃が出て行つたドアを見ていたが由香の方に顔を向け

「由香起きてんだろ」

由香はゆっくりと上半身を起こし

「ばれてたかあ……」

「まあな、四年くらいいしか一緒にいねえけどあれくらくならすべくわかる」

由香は舞とリンを起しきなによひベットからると俺が座つていたソファの隣に座り

「明日学校行ける?」

「行きたいか?」

俺が逆に質問すると少し困ったようにしたが俯きながら

「行きたいかなあ……」

静かにそして小さくそつこつた由香の顔は今にも泣きそうな顔をしていた。俺は由香を抱きしめた。

「銀次?」

と驚いたように聞いてきた由香に俺は黙つて由香の頭に手を置き黙つて少し強く抱きしめると

「また……友達と離れるのかな…………やつと普通の生活に戻つてきたと思って三年間、楽しく過いせると思つてたのに……後もつ少しのとこで壊れちやうのかな…………」

由香は泣いていた。声を殺して泣きながら、俺に話かけてくる

「ねえ……また学校も行けないのかな…………また誰か死んじやうの

かなあ「

「んな事ねえ……」

俺は由香の話に始めて口を挟んだ。

「俺がもう誰も殺させない。相手がどこのどいつだろうと俺が絶対由香を守る。由香の大切にしたいものを俺が守る。だから……信じろ」

「つ……」

由香はすく驚いていた。俺が信じじろと言つたのは由香に一度めだつた。由香は俺の言葉の『信じろ』の意味を1番知つている。

「うん……うん……」

由香は何度も頷く。頷く度に『うん』と小さく言つて俺の話を聞いていた。

「学校にも行つていい。

学校には刃だつているし俺達一人で絶対に学校の奴らには指一本触らせない……だから由香、笑つてくれ……由香の笑顔や笑い声明の声は俺の力になるから。由香が笑つてているだけで俺の力になる。だから由香の声が聞きたい、由香の笑顔が見たいから、だから俺は由香を守るんだ。それが俺の力になるから……」

俺は言い終わると由香を身体から離し由香の顔を見る

「だから由香笑つてくれそが俺の1番力になるから……な？」

由香は下をむき眼を何回か擦り

「「これで……」

由香は俺の顔を見た

「…………いい？」

由香は笑顔を俺に向けた。

「ああ、それでいい……」もう一度由香を抱きしめ言つた

「もう泣かないでくれよ

「うん……！」

由香は笑顔で俺を見ていた。その時ベットから舞とリンが

「「「！」」「お～」」

と言つて眼を覚ました。舞とリンはまだ寝ぼけた眼で俺達を見ると

「由香姉だけずるい～」

「ずるい～、お兄ちゃんリンも～」

といつて二人共俺に抱き着いて來た。俺は舞とリンの頭を撫でてやると

「「へへ～」」

と嬉しそうにしていた。

『俺はこの三姉妹、由香、舞、リンだけは何があつてもやつてみせる』と心に誓つた。その後は寝ている俺のベットに由香、舞、リンが入ってきて（ベットは以上にでかいので狭くなかった）

「リンも一緒に寝る～」

「舞も～」

「私も～」

と言つて勝手に俺を挟む用に由香と舞が居て俺の上に乗るようにリンが寝て三人とも俺の顔を笑顔で見ていた。俺はこうゆう時の三人は何を言つても聞かないのを知つてゐるので

「わかったよ」

と言つと右側に居た由香が俺の右腕を腕枕にすると

「舞も腕枕～」

と言つて左腕を掴み枕がわりにし満足そうに眼をつむつた。俺の上にいるリンは俺が右腕で（由香は肘から肩の部分にいる）頭を撫でていると眠りに着いた。

最後に由香が俺の耳元で

「おやすみ」

といつて顔を赤くしていいたのを氣付く

「おやすみ」

俺が返すと由香は満足そうな顔をして眼をつむり眠りに入り、三人から

「ス～」

と寝息をたてているのを確認して俺も眠りについた
.....

第6話（後書き）

ありがとうございます。これからこれ以上長いのが出てくるかもしれませんのがよろしくお願いします。

第7話

俺は眩しさを感じ目を覚ました。俺が起きても由香、舞、リンの三人はまだ寝ていた、俺は由香の頭を撫でると

「ん~」

と由香が起きた。

「おはよう~」

と言つて俺の顔を見た後時計を見た。時刻は朝の7時13分舞とリンを起こし朝飯を抜きホテルでこれからを話あつた。

.....結論.....

今までどうり過ごす事にした。由香、舞、リンがそれを望んだので俺は拒まない。俺達は一度家に戻る事にした。

家につくと荒れてはいたが得に怪しい奴もないので部屋から必要なものを取り一度ホテルに戻り学校の準備をする。

ホテルを出ると刃が立っていた

「どうした刃?」

刃は無言で刀系スピリットの

『破滅』(はめつ)

を出し右手に持ち俺を見ていた

「なんのつもりだ刃……」

刃は無言でこちらに近づいてくる。俺も『神楽』を出し右手で柄の中心を持つ。俺と刃との距離が10m程の所で

「悪いな、相棒。消えてくれ」

と言つて右の肩を回している。由香、舞、リンの三人はなにが起きたかわからないという表情で俺と刃の顔を交互に見ていた

「やだといつたらどうすんだ?」

俺は神楽を肩に乗せた状態で聞いた

「力づくでも消えてもらひ」

刃が右肩を回すのをとめ『破滅』を地面にさすと俺と由香、舞、リンを囲むようにスピリットで武装した集団が出てきた

「消えろ銀次」

と刃が言つたのと同時に俺と刃は距離を詰めた。お互いのスピリットがすれ違う瞬間刃は俺の左側に飛び出す、俺はその逆に同時に飛び出し俺達を囲んでいる連中を吹き飛ばす。刃は俺とは逆にいる奴ら切り倒していく。一瞬で囲んでいる奴らを倒し俺は由香達の方に駆け寄る。

「大丈夫か?」

俺の顔を見て由香は驚きを隠せない表情でいた。舞とリンは

「「つよい」」

と興奮していた。そんな俺達に刃が近づいてきて舞とリンを車に乗せ俺と由香にも乗るように指示して来た。

車の中でも由香は疑問をぶつけてきた

「どうしてさつき真田くんに切り掛からなかつたの？」

「なんかその言い方だと俺を切り倒して欲しいような言い方だな…」

「……」

俺は苦笑いをして

「刃が右肩を回したからさ」

「?どうして右肩を回すと敵じゃないの？」

「俺達のなかの合図みたいなもんさ。刃が右肩を回したら俺が左側の敵を、逆肩だったら逆の奴を、ただそれだけだよ」

由香はまだ混乱していたがほつといて刃に話を持ち掛けた

「刃、あいつらどこのサイボーグだ？」

「『ウインドウ』だ』

「はあ？『ウインドウ』ただの医療機関だろ？なんでサイボーグなんかくんだよ？」

刃が言つた『ウインドウ』とは世界一とも言える医療機関だ

「そこで死んだと見せ掛けてそいつを人体実験の道具にしていたらとしたら？」

「つーーーーでも死んだとしたなら遺体とかの問題があんだろ病院の

奴を死にましたとか言つて人体実験に使うのは無理だわ」

「戦場だよ」

刃は憎しみの「もつた眼で前を見て運転している。俺がどうみつ」とだと考へていると

「戦場で人を拉致つて死んだ事にする。そしたら誰にも怪しまれず遺体も見つかりませんですむからな……」

「…………刃君、それ本当の事なの？」

黙つて俺達の話を聞いていた由香が刃の言葉を聞き直した。その声はいつもおんびりマイペースで明るい声じゃなく怒りや憎み、などの感情入つており舞とリンは俺の服にしがみついて顔を埋めていた

「…………残念だけど本当だよ草野…………」

「…………そ…………う…………」

由香は途端に顔を俯き小さな声で

「「めんなさこ」…………「めんなさこ」…………」

「由香ひつった?」

俺は由香に訪ねると由香は

「ウイングウの社長は…………なの

「なに? 由香聞こえないよ」

「お父さんなの…………」

「えつ…………」

「『ウイングウ』の社長は私達のお父さんなの…………」

「…………本当なのか?」

由香は小さく頷いた。俺は刃の方を見ると知つてゐると言つたような顔をしていた。

「刃、今からそこむかえるか?」

「無理じゃないが……どうすんだ?」

「全部を聞き出す。それが守るためになると想つから……由香どいつする? 着いてくるか?」

「わかんない……わかんないよお……誰を信じていいいのかもうわかんないよお……どうすればいいの?……どうすれば……」

由香は混乱していた。田には涙を溜めて繰り返していた。俺は刃の方に向き

「明日また来てくれ今はまだ答えがでない」

「わかつた」

刃はそうこうとまたホテルへと向かった。

……ホテルにて……

ホテルに着いた俺達はまた四人で同じ部屋をとりソファに座つて黙りこんでいた。俺は舞とリンに

「刃のどこに行つていってくれるか? ロビーにいるから

「「うん」」

元気なく返事をした舞とリンはそのまま部屋をでていった。それを見ていた俺に

「どうしたらいいの?……誰を信じればいいの……ねえ、銀次……教えてよ……」

由香はまた泣いていた。俺は由香の肩に手を置いて、俯いている由香の顔を覗き込む。

「由香お前が思つように動いてくれ……そしたら俺は由香の思いを貫く槍になるから……俺がお前を支えてやるから……」

しばらく由香は黙つて俺の顔を見ていたが

「ずるこよお、やうやつてこいつばつか優しくしてえ……そんな事言つからビツしても銀次に甘えちやうよお」

由香は俺に抱き着いてきた

「甘えていいんだよ、由香は一人じゃないんだだから甘えていいんだよ……」

由香は黙つて何度も頷いていた。

由香が泣き止み俺の顔を見て

「お父さんのところにいかなきや……着てきてね、いやだとは言わせないから……」

「俺は由香の思いを貫く槍。俺の槍の主に従つままでだ」

「うん」

俺と由香はそのまま刃のところに向かつと舞とリンが泣いていた

「「「うわあ～ん」」

と言つて俺の足にしがみつき服に顔を押し当てるで泣いていた。俺と由香が混乱していると刃が

「『お兄ちゃんと由香お姉ちゃんに嫌われたあ～』って言って俺んとこ泣きながら来てたぞ」

俺はあの時の自分の表情を思い出した。自分では普通のつもりが舞とリンには怒つているような雰囲気を纏つた俺が『刃のとこ……』って言つて嫌われたと思つていたらしい俺がリンを由香が舞を抱き上げてそのまま抱きしめ頭を撫でてやる

「俺が舞やリンの事を嫌う訳無いだろ」

「だつて……ヒック……あの時……お兄ちゃんとお姉ちゃんヒック……凄い恐かったん……ヒック……だもん……ヒック……だから……」

「そつかあ、『めんな不安にさせて……でもなリン舞』

「……ヒック……なに？」

「俺はリンの事大事だし、好きだからな、俺はリンと舞好きだから嫌う事なんて絶対ないよ、リンと舞は俺と由香の事嫌いか？」

「ううん、好き」

「なら信じてくれよ、俺と由香は舞とリンが好きだよ、な？だからもう泣かないでくれよ。俺は舞とリンの笑つてる顔を見たいな」

俺が喋ると舞とリンは俺と由香に向かって

「「「ううう……」」

と言つて笑つてくれた。刃がその様子を見て『やれやれ』って感じで見ると

「明日でいいのか？」

俺と由香は無言で頷く。刃はそれを見て笑い帰つて行つた。

「舞、リン明日は早いからもう寝るか？」

「お兄ちゃんも一緒に寝る～」

と言つていたのでベットに四人で入り昨日と同じ用に眠りについた。

第7話（後書き）

もう少しじで一度終わります

最終話（前書き）

第一部完です。ありがとうございました。（――）

最終話

深夜2時

俺は周りで寝ている由香達三人を起さないよひこむつべりとベッドから出る。

「ごめんな由香……」

俺は部屋に手紙をおき部屋を出てロビーに行く。

ロビーには刃が届て俺の事を確認すると手に持っていたキーを俺に投げてよこした。

「持つてけ、そのかわり傷付けないで返せよ」「みせよ

「無理だな」

「んじや変わりに帰つてきたら殴らせろそれで勘弁してやる」「無理だな

「……我が儘言つてんじやねえよ、俺はこれから起きる草野姉妹の相手もしなきやならねえんだぞ」「頑張れ

「やだ、全部話すからな」

「どの辺りから?」

「お前が由香の事を好きな事辺りから」

「……死ね……」

「なら帰つてきたら殴らせろ。それで勘弁してやる」「……一発な

「5発な」

「多すぎ」「あが

「んじや3発」「

「生きてたらな」

「おう、死んで帰つてきたら顔ボコボコにして埋めるから」

「……行くわ」

「おう、相棒」

『パチンつーー』

俺は刃とハイタッチしてホテルから出していく。

「死ぬなよ」

俺は刃の一言に苦笑いで答えそのまま何も答えず車に乗り込み走りだす。

俺は車のなかにあるモニターからの指示に従い目的地へと向かう。モニターには『目的地、ウインドウ本社』と表示されている。

3時46分……ウインドウ本社に着いた。

勿論めんどい事はせず突っ込む。右手にスピリット『神楽』左手にスピリット『鬼神』俺のスピリット『鬼神戦神楽』は本来一つで一つの武器である（形は両方とも同じである）俺は正面から堂々と入る。中に入ると警備員らしき人に俺は右手で顎をぶん殴り気絶させた。同時に至る所からスピリットを持った『人間』がしてきた。

「雑魚が」

上に向かつて飛び両腕をクロスさせるように振る。

『神楽』『鬼神』から出てきた斬戟をまともに受けた人間は床につづくように倒れる。その場にいた武装人間は全員戦闘不能に陥つた。その場所から下に向かい人体実験をしていくと思われる地下に移動する。そして地下の無駄に広いところにでる。その中央には人影が一つあった。その人影は俺の方に徐々に近付き顔を表す。その人影は

「おじさん

由香達のお父さんだつた。

「やあ、銀次どうしたんだいこんな所で？」

「聞きたい事があつてな」

「なんだい？」

「おばさんに何をした？」

「特に何もしてないさ。ただちょっと人体実験はしてはいけないと
か言つて邪魔してくるから」

「そんな理由でサイボーグにしたのか？」

「そうだよ、何かおかしいかい？ 邪魔をするものは全て消す

「それがあんたのやり方か？」

「ああ、そして銀次。君も邪魔だ。だから……消えてくれ」

突然由香達のお父さん草野ケイの周りに風が吹き荒れる。

『スパツ』俺は頬に痛みを感じ触る。

『ドロツ』て感触が指に伝わる。

「どうだい僕のスピリット『風陣』は

俺は無言でケイの方を見る

「近づいてこないのかい？ 所詮はガキだな傷ができる恐怖で何もでき
ないなんてな」

「…………ないのか？」

「ん？」

「戻るきはないのか？ 今まで人体実験に理由してきた人達に詫びる
きはないのか？」

「…………」

「あんた由香や舞、リンの父さんだろ。あいつらになんかいこうこと
ねえのかよ」

「…………クククつ…………」

「何がおかしい？『言ひ』とはねえのかあるのか聞いてんだが」「ないね！－全くないね！－詫びるきはないのか？あるわけないじゃないか！－由香達に『言ひ』ではないかだつてあるわ『ズバツ』

『コト』

「その後の言葉は首だけでかたれ……由香達は俺が守るから」

もはや首から下がない。俺は首から上をじばらくぼうぜんと見ていたが背中を向け刃に連絡を入れようとすると『ガシッ』と足を何かに捕まれた。そこには首から上がない体があった。

「なつ……」

その体はゆつくりと立ち上がる。俺は思わず距離を取ると突然『神楽』『鬼神』が手から消えた。俺が驚いて睡然としてるとビードから声がして広場に響く

『スピリット破壊兵器。発動完了。これより世界のスピリットを破壊します。

スピリット破壊…………』

「なんだそりや、んな事あんのかよ…………」

俺は睡然としながらも自分のスピリットが出てこない事がわかると一人で何があつたかを考えていた

結論

「ま、いいか」

俺は難しい事を考えるのは得意じゃないしな。俺はそう結論をだし由香達の元に戻つて説明しなきやいけないと想いながらそのままその場を後にした。

俺がホテルに戻り部屋に入るとボコボコになつてゐる刃とその上で泣き叫ぶ舞とリンそしてソファによしかかり俯きになつてゐる由香がいた。

「…………ただいま」

『バツ』と全員あわせて俺にふり戻り

「お兄ちゅん！…！」

と真っ先に俺に飛び掛かつてきたリンは俺を押し倒し『うわあ～ん』と膝の上で号泣した。

「銀兄！…！」

とこゝで俺の腕にしがみついてきたのは舞だ。舞も同じように腕を掴み顔を腕に押し付け号泣。

「銀次」

と呼び俺に修羅のような雰囲気で近づいてくるのは刃だそくざに俺へと蹴り右フックを噛ましてくる。俺がそれをくらうと泣いていた舞とリンが刃に飛び付き

「「いやめんな～」」

と言つて刃の顔を引っ搔いたり噛み付いたり跳び蹴りかましたりしてボコボコにする。

俺はソファの方から何かを感じてその場に固まる。そのときに

は無表情の由香がいた。

「舞、リン俺と一緒にロビーへ行こうか」

「「「うん」」

刃が危険を感じ舞とリンを連れてロビーへと行こうとした。それを見た俺は

「ちょっと、おい刃逃げんな……！」

「知るか……お前が悪いんだから自分でなんとかしろ……俺は被害くいたくない……！」

といつて刃はダッシュで部屋を後にした。

部屋にいるのは俺と由香。だが俺は固まつて動けない。

「銀次

「ハイツ……！」

感情が入ってない声で呼ばれ怯えた声で大きな返事をする俺

「「「ちむいて」」

俺はあるで金縛りのような間隔にあいながらも由香の指示どおり由香の方を向く（向くの2分ぐらいかかったけど）するといつのもにか俺の目の前に由香が移動していた。由香の腕を上げたので俺は思わず『殴られる』思い眼をつむる。……痛みを感じないと想い眼をあけると腕を振り上げて止まっている由香がいた。

「…………由香?」

おかしいと思ふ声をかけると由香は俺に抱き着いて泣いた。

「バカア、……心配……ヒック……したんだから……ヒック……バカア……」

「『めん、由香』

「今度……ヒック……『んな事勝手に』……ヒック……したら許さないん……だからあ……」

「きもにめいじとくよ」

俺は由香の頭を撫でた。

「だか、ひ」

俺は由香の顔を上げて

「これで許して」

『チユウ』

俺は由香にキスをした。

由香はびっくりしていたが顔を放したら顔を赤くして俯いている。
(もじろん俺も赤いが)

「…………つかい」

「ん?」

由香が何か呟き俺が聞き直すと

「もつ一回」

といつて顔を俺に向けた。俺はまた由香にキスをした

俺は誓つた。『俺が守る誰か敵になろうと関係ない。俺が由香、舞、リンを絶対守る』

三日後……

「やっぱわかんねえか」

「ああ、スピリットを誰も使えないんだもんなあ」

俺と刃でスピリットの事を調べては見たが全く解らなかつた。

「まあ、なんとかなるさ」

「そうだな、のんびり行くかあ、なあ相棒」

「そうだなせつかく日常に戻つたんだ。まあまたなんかあつたら頼むぜ相棒」

END

最終話（後書き）

この後『能力者』に続きます。どうか今後もよろしくお願いします
m () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5094a/>

スピリット

2010年10月11日00時18分発行